

大学時報

University Current Review

特集 学生に海外体験を——留学のススメ



No. 351 Jul. 2013

日本私立大学連盟



ICUマクリーン通りの桜



カリフォルニア大学から贈呈された第二世代の第一号の桜の苗木を植樹する、ジャン・ザビエル・ギナル・カリフォルニア大学交換留学プログラム最高責任者(右)と日比谷潤子ICU学長

だいがくのたから……国際基督教大学(ICU)

ICUマクリーン通りの桜

日 本語の「サクラ」は花を表すのに対し、英語の cherry は果実「サクランボウ」を指し、言葉がその文化を表すという例

によく使われる。欧米では、チェリーの形や味を知らない人はいないが、花のほうはピンとこない人がけっこう多い。そういう違いに言及し、日本（文化）は理解されにくいなどといわれることがあるが、「サクラ」の語源が動詞「咲く」と接尾辞「ら」であると知れば、美しく咲いた花を表す blossoms をイメージできない人はいないだろう。国際的にも知られている唱歌「さくらさくら」の英訳 cherry blossoms, cherry blossoms は、'blossoms, blossoms' としてほうが適切なかもしれない。

国際基督教大学（ICU）の正門から大学礼拝堂に向けて約六百メートル、まっすぐに延びるマクリーン通りの両側には、百六本の桜が並び、春の満開時にはみごとな桜のトンネルをつくる。第二次世界大戦後アメリカでは、平和に貢献する人材を育む新しい大学ICUの献学を目指し、募金キャンペーンが展開された。「広島と長崎への哀悼の意と和解の願いの表れ」として寄付を呼びかけたジョン・マクリーン牧師（ICU名誉人文学博士）をはじめ、全米各地の市民の支援がこの桜並木を誕生させた。献学時に植えられた桜は、二〇一三年に開学六十周年を迎えたICUと同様、還暦を迎え、二代目の植樹が待たれる老木も見え始めた。その第二世代の第一号の桜の苗木が、ICUとの国際教育交流が五十周年を迎えるカリフォ

ルニア大学（UC: University of California）から贈呈され、両大学のさらなる交流発展を祈念して植樹された。

開 学当初から留学生を受け入れ、また海外に送りだしてきたICUは、戦後日本の国際教育交流の草分けであり、つねに先

駆的な役割を担ってきた。また、UCにとってICUはアジアでは初の交換留学協定校であり、大学在学中の学生がグループで留学する制度は、当時アジアでも初の事例だったといわれている。このような背景から一九六四年、日本におけるUC交換留学プログラムの拠点として、ICU内にUCセンターが設けられた。UCの教授がディレクターとして着任し、スタッフと共にUCからの留学生や、留学を希望する日本の大学生に助言や支援などを行っている。

両大学が半世紀にわたって学生に海外留学を奨励し、留学を通じて専門分野の知識と国際的な視野を広げる機会を提供してきたことを顧みると、UCからICUへの第二世代の桜の苗木の贈呈は感慨深い。意義ある海外留学とは、文頭の「サクラ」の例のように、まず世界との違いを学び、そしてまた世界との深い共通性を見いだすことによって、日本をも理解することではないだろうか。このように考えると、国際教育を使命に掲げる大学の玄関先に、最も日本的なシンボルといわれる桜があることに矛盾はない。マクリーン通りの桜は、ICUの宝としてふさわしく、次の世代も力強く育ち、美しい花を咲かせるのを見守りたい。

大学時報 目次

No. 351 Jul. 2013

巻頭言

語る力／清水 敦

教育・研究と社会貢献

楠見晴重

10

座談会

世界で活躍する人材を養成するための真の外国語教育とは

吉田研作／鳥飼玖美子／鈴木佑治／高島健造／(司会)仙波憲一

14

SNSと共存する社会へ

小城英子

76

貸与型奨学金の本質について考える — 学生の将来のために

久米忠史

82

特集 学生に海外体験を — 留学のススメ

グローバル大学を目指して — 早稲田大学の事例

内田勝一

30

羽ばたけ日本発の世界市民

神余隆博

36

地方大学で考えた「グローバル人材の育成」

坂田 隆

40

私学の個性とグローバル人材の育成

山田史郎

46

多くの学生が海外留学を体験する仕組みを

福田好朗

48

— 海外留学は、グローバル人材へのはじめの一步

「グローバル時代の強い個」の育成のために

勝 悦子

52



〈表紙〉

制作者名:有地好登(日本大学芸術学部教授)

作品名:Phase-II

制作年:2011年3月

寸法:28×20センチ

技法:エッチング、アクアチント、シン・コレ

明日への試み

中央大学工学部

新しい工学の教育を目指す

小特集 大学評価と改革の展望

大学の質保証と情報公表——大学ランキングを超えて

大学ランキングとの付き合い方

「大学ランキング」二十年に見る大学評価

井口弘和

92

松本亮三

58

小林雅之

64

中村正史

70

すいそつ

成長戦略とグローバル人材

島田精一

56

わが街——大学のある風景

多摩の開発とめかい編み——東京都多摩市

谷本寿男

90

わが大学史の一場面——日本の近代化と大学の歴史

日本の高度経済成長との相似性

衛藤卓也

96

加盟校の幸福度ランキングアップ〈博物館編〉

ユニバーサルな博物館を目指して・南山大学

黒沢 浩

102

来館者・学生に近い博物館を目指して・東海大学

手塚覚夫

104

博物館はおいしい・東京農業大学

安田清孝

106

クローズアップ・インタビュー

作家 朝井リョウ氏に聞く

(聞き手)山岡三子

108

新会員代表者紹介

駒澤大学

116

新学長紹介

文教大学

116

大学点描

武蔵大学

THESAURUS UNIVERSITATIS だぐがくのたから

国際基督教大学(ICU)

私立大学フォーラム

117

連盟ニュース

118

編集後記

118

(カット)熊谷有子

清水 敦 武蔵大学学長。'82東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。武蔵大学経済学部助教、教授を経て現職。専門は経済学の歴史、経済理論。

楠見晴重 関西大学学長。'81関西大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。専攻は土木工学。'82同大学工学部助手、教授、理事などをを経て、'09より現職。

吉田研作 上智大学言語教育研究センター長。'74同大学院、'79ミシガン大学上智大学大学院修了。専門は応用言語学。主著「外国研究の現在と未来」他。

鳥飼玖美子 立教大学特任教授。'07サウサンブロン大学博士課程修了(Ph.D)。専門は、言語コミュニケーション論、英語教育論、通訳翻訳学。

鈴木佑治 立命館大学生命科学部教授、慶應義塾大学名誉教授。'78ジョージタウン大学大学院言語学博士課程修了(Ph.D)。専攻は言語学、英語学。

高島健造 玉川学園IB担当シニアスタッフ。'74玉川学園高等部英語教諭、'08同学園教育部長、'12より現職。

仙波憲一 青山学院大学学長。青山学院大学

大学院経済学研究科博士課程単位修得済退学。理論経済学専攻。国際政治経済学部長等を経て現職。主著「市場経済の理論とその応用」他。

内田勝一 早稲田大学常任理事。民法専攻。

'75早稲田大学大学院博士課程修了。'84法学部教授、'04国際教養学部学部長、'09国際化拠点整備事業の構想責任者等を歴任。

神余隆博 関西学院大学副学長(国際連携機構長)。'72大阪大学法学部卒業後、外務省入省。国際連合日本政府代表部特命全権大使、駐在ドイツ特命全権大使等を歴任。

坂田 隆 石巻専修大学学長。'78東北大学大学院農学研究科畜産学専攻博士後期課程修了。'89石巻専修大学助教、教授、理工学部長を経て、'07現職。専門は大腸生理学、ラクダ。

山田史郎 同志社大学副学長。'83ペンシルベニア大学歴史学研究科修士課程修了。'84同志社大学文学研究科文学史学博士後期博士課程中退。専門は西洋史、アメリカ史。

福田好朗 法政大学常務理事。'71中央大学理工学部卒業。'89神戸大学工学博士取得。'96法政大学工学部教授、大学院システムデザイン研究科長、大学院委員会議長等を歴任。

勝 悦子 明治大学副学長、政治経済学部教授。茨城大学人文学部助教などをを経て、'08より現職。中央教育審議会大学分科委員会、財務省、厚生労働省など審議会委員。

島田精一 学校法人津田塾大学理事長。'61東京大学法学部卒。三井物産株式会社代表取締役副社長CIO、住宅金融支援機構理事長等を歴任。主著「IT革命と商社の未来像」他。

松本亮三 東海大学観光学部部長。日本私立大学連盟教育研究委員会委員長。'77東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。専門は観光人類学、文明学、アメリカ大陸の先史学。

小林雅之 東京大学・大学総合教育研究センター教授。'82東京大学教育学研究科博士課程単位取得退学。博士(教育学)。専攻は教育社会学。主著「進学格差」他。

中村正史 朝日新聞出版、教育・百科本部長、「大学ランキング」編集長。教育・大学問題に携わり、'94「週刊朝日」記者時代に「大学ランキング」を企画し創刊。

小城英子 聖心女子大学文学部歴史社会学科人間関係専攻准教授。'03関西大学大学院社会学研究科学位取得。博士(社会学)。専門は社会心理学、マス・コミュニケーション研究。

久米忠史 奨学金なるほど!相談所代表、奨学金アドバイザー。'91関西大学経済学部卒。'05より、全国各地で保護者や受験生に大学進学費用対策の講演を行う。

谷本寿男 恵泉女学園大学人間社会学部国際社会学科教授。'77京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学。海外経済協力基金、国際協力銀行等を経て'05より現職。

井口弘和 中京大学工学部部長。'76東京理科大学理工学部物理学科卒。'96名古屋工業大学大学院博士号取得。工学博士。

衛藤卓也 福岡大学学長。'74神戸大学大学院経営学研究科(商学専攻)博士課程満期退学。専門は交通経済学・交通政策。同大学教授、学部長等を歴任し、'07より現職。

黒沢 浩 南山大学人文学部教授。'87明治大学大学院文学研究科修士課程修了。専門は考古学、博物館学。'88明治大学博物館勤務、'04南山大学人文学部准教授、'12より現職。

手塚覚夫 東海大学海洋科学博物館学芸員。'01東海大学海洋学部卒。'03学校法人東海大学社会教育センター・博物館学芸業務課にて勤務。

安田清孝 東京農業大学「食と農」の博物館事務室長。'77青山学院大学経済学部卒。'77東京農業大学に入職、その後、東京情報大学、第一高等学校、図書館勤務等を経て、現職。

朝井リョウ 小説家。早稲田大学文化構想学部卒。在学中の'09「桐島、部活やめるってよ」で小説する新人賞を受賞し、小説家デビュー。'12刊行の「何者」で第148回直木賞受賞。

山岡三子 フリーアナウンサー。学習院大学卒。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士後期課程修了。博士(社会デザイン学)。名古屋短期大学客員教授。

ゼミの武蔵

ゼミの4年間 どこまでいけるか



武蔵大学

- 経済学部 / 経済学科、経営学科、金融学科
- 人文学部 / 英語英米文化学科
ヨーロッパ文化学科
日本・東アジア文化学科
- 社会学部 / 社会学科、メディア社会学科

ゼミの武蔵は、 次のステージへ

武蔵大学が目指すのは、自ら調べ、考える力をもち、人々と協力して実践できる人を育てること。伝統の少人数教育をさらに発展させ、もっと自由に、自発的に学べるキャンパスを実現していく。



1・2・3 大講堂 (1:内部、2:武蔵学園記念室、3:外観) 1928年建築。日比谷公会堂などを手がけた佐藤功一氏による設計。

4 GS(グループスタディ)ルーム 学部ごとに設置。正課外のゼミ活動を支え、促進するための設備を整えている。

5 キャリア支援センター 少人数教育の伝統を生かし、「武蔵しごと塾」をはじめとする実践的なキャリア支援を行っている。

6・8 Musashi Communication Village (MCV) 英語が公用語の“キャンパス内留学”ができる参加体験型学習施設。無料の少人数英会話レッスンや英語学習カウンセリングなど、多彩なプログラムを用意している。学生スタッフとして参加できる点も大きな特徴。

7・9 新1号館 (7:外観、9:ゼミ室) 2012年秋完成の新しい学びの拠点。太陽光パネルや屋上緑化など、環境に配慮した最新施設には、ゼミ室やシアター教室、CALL教室、国際センター、外国語教育センター・MCVなどがある。

10・11・12 大学図書館 (10:外観、11:ディスカッションスペース、12:PC設置席) 新1号館の完成と同時期にリニューアル。ディスカッションスペース、PC設置席、個人ブースなどの学習エリアを新設し、学生の学びをバックアップしている。



江古田ミツバチプロジェクト

3号館屋上を利用しミツバチを育て、学生や地域住民が中心となって蜂蜜を採取する取り組み。地元・江古田の協力店により武蔵大学産蜂蜜の商品が開発され、販売も行っている。



正門を抜けると右手に佇む3号館



年に数回催される見学会は毎回大好評!

武蔵大学の歴史

The History of Musashi University

旧制高等学校時代から90年、 「建学の三理想」を目指して

建学の 三理想

1. 東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物
2. 世界に雄飛するにたえる人物
3. 自ら調べ自ら考える力ある人物

武蔵大学は開学以来、徹底した少人数教育、ゼミ教育を通じて、自ら情報を収集・分析し主体的に考える力の育成を重視しています。また、国際的に活躍できる能力のある人物を育成することも〈建学の三理想〉として掲げています。

「自立」「対話」「実践」

「建学の三理想」を踏まえ、新しい時代の大学に求められる知の創造、継承と実践を目指し、〈3つの目標〉を定めています。

自立 | 自ら調べ自ら考える

対話 | 心を開いて対話する

実践 | 世界に思いをめぐらし身近な場所で実践する

The Founder

本学の前身は、明治、大正、昭和にわたり財界で活躍した根津嘉一郎（初代）が、1922（大正11）年に創設した、わが国初の七年制高等学校である旧制武蔵高等学校です。根津は、東武鉄道や南海電気鉄道など日本国内の多くの鉄道敷設や再建事業に携わり、「鉄道王」と呼ばれました。その後の学制改革に際し、経済学部の単科大学として1949（昭和24）年に本学を開学し、今日では3学部8学科、大学院2研究科を擁する文系総合大学となっています。



創設者
初代 根津 嘉一郎
Kaichiro Nezu



武蔵大学

大学時報

2013・7

第351号



語る力

清水 敦 ● 武蔵大学学長

大学生の学習時間の多くは「聞く」と「読む」ことに費やされており、これに次ぐのは「書く」ことであろう。「語る」ことに充てられている時間は、これらに比べて少ない。大学教育では、「聞く」「読む」という受動的行為だけでなく、「書く」「語る」という能動的な行為も重視されるべきである。そして「語る」ことは、「書く」ことに比べてより直接的な自己表現であり、できるだけ多くの経験を学生に積ませ、「語る力」を育てることが重要であろう。

教育・研究と社会貢献

楠見 晴重 ● 関西大学学長

一 「学の実化」と社会貢献

昨今のメディア報道における大学をめぐる話題は、「秋入学」「グローバル人材養成」「教育の質保証」「就職活動時期の変更」など、かまびすしい状況が続いている。これらは、日本の大学が抱えている多くの問題の一端であるが、本稿においては、大学の使命としての教育・研究に加えて、近年「社会貢献」が重要な使命として位置づけられていることに関し、関西大学の取り組みを紹介しながら私見を述べてみたい。

当然のことながら、大学における教育と研究、社会貢献は、個別に存在できるものではなく、それぞれが関連しつつ、トライアングルのような構造でうまく機能するものであることは言うまでもない。現在でも、大学での講義は、従来の一方向的な方法から双方向的

な講義を増やすことによって、単に知識の伝達だけでなく、学生自ら考える力を育成する努力が進められている。大学におけるこうした授業改善の努力も、さらに進んで、大学から外へ出て、地域の住民と学生が共同して課題と向き合う場と状況を教育に組み込んでいけば、より一層効果的な双方向の学習機会を生み出すことができることになる。こうした中から課題解決が図れば、それ自体社会貢献という使命を果たし、そこからさらに研究課題や教育課題が見いだされることにもなる。

ところで関西大学には、一九二二年、第十一代山岡順太郎学長が提唱した「学^{がく}の実化^{じらげ}」が、現在も「学是」として定着している。これは、大学が学問の府として真理追究のみに終わるのではなく、社会のあるべき姿を提案し、その必要とするものを提供することによって、学理と産業界・官界との橋渡しをするべきである



という、「学理と実際との調和」を求める考え方であった。大学がその研究成果を広く社会へ還元すること、逆に、変化に応じて社会からの要請を吸収し、よりよい社会を目指した学問のあり方を追究すること、すなわち、「学の実化」とは大学と社会との相互作用を求め続けているものと言える。

二 地域との関わり

教育・研究の成果を、産業界・地域・自治体と連携して広く社会に還元する「社会貢献」は、大学の社会貢献機能の中でも社会連携事業として、現在の大学に課された大きな使命となっている。

現在、関西大学では十九の自治体・組織とさまざまな連携事業を行っているが、このうち最も新しい取り組みとなるのが、本年一月十六日に協定書を締結した「道頓堀商店会」との連携協力事業である。道頓堀の開削四百年を二年後に控えた商店会の都市再生の取り組みに対して、大阪に生まれ大阪に育てられた大学として協力し、大阪の文化遺産を活用し、大阪文化の再生、地域経済の活性化に貢献すべく締結した協定である。そこですでに進行している取り組みとして、近代大阪の都市景観をコンピュータグラフィクスによって復元する可視化プロジェクトがある。

大正期ににぎわいを見せた道頓堀五座と称される五つの芝居小屋、つまり浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座の立ち並ぶ街並みを複数の歴史的な資料をもとに再現、往年の道頓堀らしさを将来の街づくりに反映させるための貴重なデータとなっている。この取り組みは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受けた大阪都市遺産研究センターが推進するプロジェクトであり、歴史学、CG技術、建築学など多岐にわたる専門分野の教員と学生が、協力・分担しつつ、本学が推進してきた「なにわ・大阪学研究」の一翼を担っている。そして地域からは、学生ならではの発想や実行力で、道頓堀をさらに魅力的な街へ発展させることにも期待が寄せられている。

もう一つ、地域研究と地域連携が実践的な地域貢献にすでに結びついた例を紹介したい。国内最長と言われる「天神橋筋商店街」と協定を締結し、商店街とゆかりが深く千二百年の歴史を誇る大阪天満宮などの地域文化拠点とも連携しながら、地域全体の活性化への寄与も試みている。同商店街内には、先プロジェクトと同様に、戦略的支援事業に採択された研究プロジェクトである社会的信頼システム創生センターの研究拠点「関西大学リサーチアトリエ」を設置し、商店連合会の人々と協力し、違法駐輪の排除から伝統文化の振興まで、実践的な活動を展開している。商店街に溶

け込んだりサーチャトリエは、商店街内に設置される研究拠点としてはおそらくわが国初の事例として、年間五千人超が訪れ、大学と地域の人々を結びつける実践的な結節点として機能している。

地域との連携は、大学の近隣のみにとどまるものではない。昨年七月十日に協定を締結した岩手県上閉伊郡大槌町は、東日本大震災において津波の大きな被害を受けたが、大槌町との連携事業においては、地域の潜在的な人的資源を育成し、新産業となるIT関連企業を外部からの誘致によらず地域住民主体で起業、自律的な経営が可能となるまでサポートするプロジェクトを推進し、現時点において、八名の雇用を生み出している。これはおそらく、被災地との連携事業で初めての成功事例であろう。また、当地にも天神橋筋商店街と同様の研究拠点を設置しており、被災地の若者の定着・流入と文化の復興・展開を図るという大きな夢の実現に向け、被災地支援のハブとしての機能を果たすための取り組みを活発に行っている。

三 躍動的な知の循環

産業界及び官公庁などとの共同研究、受託研究を進める産学官連携により、イノベーションの推進を図り、大学の研究成果の実用化を目指すことも、「学の実化」

にほかならず、知の創造拠点である大学として、社会貢献の重要な取り組みとして位置づけられるべきものである。ここでは、自然科学の分野から二つの事例を紹介したい。

風力や太陽光など、自然現象に頼る自然エネルギーの不安定な発電量を克服するため、電気を効率的に蓄え、使用時に必要なだけ取り出せる技術は、今後の地球社会にとって不可欠なものである。そこで注目されているのが、「キャパシタ」という蓄電デバイスであり、関西大学では、多くの企業との共同研究を試みながら、キャパシタの小型化・高性能化に挑んでいる。

キャパシタ研究は、家庭でつくる風力や太陽光のエネルギーを蓄積する蓄電装置に生かされ、さらに電気自動車の飛躍的な普及にも直結するものである。環境保護や省エネルギーの観点から、自動車は次世代ハイブリッド車や電気自動車に大きく移行しつつあるが、その開発のキーとなるのも蓄電デバイスである。海外では「走りながら充電できる電気自動車」が試作されているように、事前にフル充電しなくても、どこでも素早く充電電できる自動車が期待される。

もう一つ紹介したい研究は、近い将来、世界の常識を大きく変えるイノベーションにつながる研究である。かつてはセラミックスなどの陰に隠れてマイナーな存在だった圧電性ポリマーであるが、長年にわたる研究

により、圧力を受けると電圧を発生させる薄いシート状の「圧電性ポリマーフィルム」が開発されている。

軽くて透明性や柔軟性もあるため、モバイルメディアの急激な発達とともに、注目を集めている。自ら電圧を起こすために電池も不要な圧電性ポリマーフィルム素材に複数の企業が注目し、共同研究を進める中で、曲げたりねじったりできるリモコンが誕生した。これについては現在、国内有力企業らとの産学連携による共同研究によって、実用化に向けての検討が進められている。さらに、ハンカチのように「折り畳めるスマートフォン」や「壁に貼れるスピーカー」などへの応用についても研究され、国内のマスコミだけでなく、海外のテレビ番組でも取り上げられている。

こうした共同研究による社会貢献とは、大学の研究室が、例えば総合化学メーカーと電子部品メーカーといった業態の異なる企業をつなぐ「ハブ」となることで、社会が必要とする製品開発や技術革新を促していくということである。

さらに共同研究は、学生の成長にとっても貴重な機会となるという点でも、大学に課せられた「次代を担う若手研究者の育成」という社会的使命にかなうものである。学生は、大学における基礎研究で力をつけるとともに、企業などとの実践的な共同研究の中で研究者と意見交換を通じて、研究者としてのマインドを大

きく育てることもなろう。

以上は、自身の専門が地盤工学であることから理工系を中心とした社会連携事業を紹介することになったが、これら以外にも、学是である「学の実化」に基づいた社会貢献をもたらす多彩な教育・研究事業が進められている。そして、他大学においても、それぞれの大学の特色に応じた社会貢献を意識した教育・研究活動が展開されている。

もちろん、あらためて「社会貢献」を大学の使命として意識しなくとも、大学が、地球社会の持続的な発展のために何ができるのかを問い、文理を問わず新たなイノベーションを生み出す原動力となるような「知の創造と昇華」を目指すこと自体が社会貢献である。

さらに、現在の大学の最も重要な使命は研究に裏打ちされた教育であり、社会に対して有為な人材を育成し送り出すことも社会への貢献そのものである。それに加えて、以上述べてきたような種々の社会貢献事業をあらためて教育に結びつけることによって、学生の潜在能力を引き出し、学生自ら考え、自ら実践する機会を提供することは、今後ますます重要になってくる。社会貢献というキーワードを意識した教育と研究のトライアングルをますます有機的に関連させることは、高等教育の約七五%を担っている私立大学の存在価値をさらに高めることにもなるのではないだろうか。